

『小説海』掲載の「老残遊記」記事

杜 筆 恩

『老残遊記』の作者について、初出の『繡像小説』では「洪都百鍊生」なる筆名が使用されており、本名は無かった。この筆名が劉鉄雲のことだと最初に公に明らかにしたのは、『新青年』第三卷第一号（1917.3.1）掲載の錢玄同の投書だと言われている。そして、『老残遊記』の作者としての劉鉄雲の経歴を最初に公に紹介したのは、『最近之五十年』（申報社1923.2）掲載の胡適「五十年来中国之文学」だと言われている。

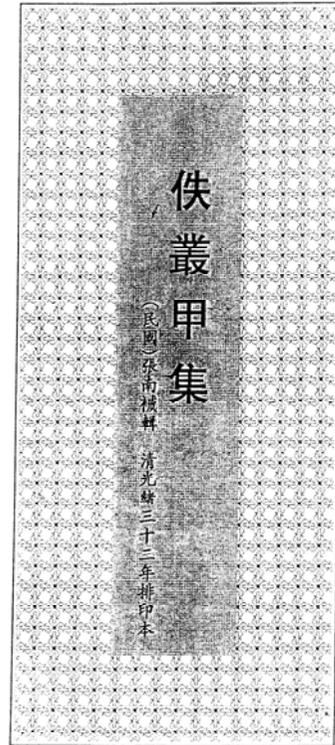
上記内容はすべて樽本照雄「胡適は「老残遊記」をどう読んだか」（原載『大阪経大論集』120（1977.11.15） - 同『清末小説閑談』法律文化社1983.9.20再録を使用）及び樽本照雄「劉鉄雲「老残遊記」と黄河（1）」（原載『清末小説』19（1996.12.1） - 同『清末小説叢考』汲古書院2003.7再録を使用）で言われていることである。

なお、樽本照雄「劉鉄雲と『龍川先生詩鈔』」（原載『清末小説研究会通信』39（1985.8.1） - 同『清末小説きまぐれ通信』清末小説研究会1986.8.1再録を使用）では、『佚叢甲集』所収『龍川先生詩鈔』の剣心跋（末尾に「丁未八月」とある）から光緒丁未（1907）にすでに『老残遊記』は劉鉄雲の作であることが明らかにされており、錢玄同より早い旨を述べている。しかし、後の上記樽本1996では、これには一切触れずに、上記樽本1977の説を繰り返している。

この点について、樽本氏は筆者への私信で、『龍川先生詩鈔』自体の発行年が不明であり、『佚叢甲集』の発行年も不明で、跋文が光緒丁未（1907）に書かれていたとしても、公になったのが錢玄同よりも早いことを確定できないため、樽本1996では何も触れなかったと述べられた。更に、『龍川先生詩鈔』が『説庫』（王文濡輯 文明書局、中華書局1915.10）にも収められていること（これは上記樽本1985にも言及が



樽本照雄蔵



『古籍佚書拾存』所収

ある)、『佚叢甲集』所収『龍川先生詩鈔』が大阪府立中之島図書館に所蔵されていることの二点をお教え下さった。前者について、国立国会図書館蔵本で確かめたところ、肝心の跋文は無かった。後者は、『大阪府立図書館蔵漢籍目録 四部之部』(大阪府立図書館編集兼発行1966.3.30)「集部 第二別集類 九清季之属」掲載の書誌から見て、樽本氏蔵本と同じものであると推測する。また書誌中に「光緒三十三年」とあるが、これは樽本氏の私信中の指摘どおり、跋文に見られる「丁未」から採ったもので、実際の発行年ではないだろう。

『佚叢甲集』は『古籍佚書拾存』(殷夢霞、王冠選編 北京図書館出版社2003.8)に影印で収められている。その影印本を見ても、封面も無く、奥付も無く、発行年は確認できない。扉頁に「清光緒三十三年排印本」とあるが、やはり跋文に見られる「丁未」から採ったもので、実際の発行年ではないだろう。

つまり、『佚叢甲集』所収『龍川先生詩鈔』剣心跋の記述は、確かに錢玄同より早い、発行年が不明なので、『老残遊記』の作者が劉鉄雲であることを最初に公

に明らかにした確実なものとは言えない。

また、樽本1977注1に、「『老残遊記』の作者が劉鶚であることを指摘したものに林琴南『賊史』(Oliver Twist)序言(一九〇八年)があるというが未確認」とある。こちらについても、樽本氏からの私信で、序言には「今日健者、惟孟樸及老残二君」とあるのみで、「指摘したもの」ではない旨の御教示をいただいた。(樽本氏の数度にわたる御教示に感謝申し上げます)

結局、現在判明している限りでは、冒頭に述べた錢玄同、胡適が早いことになる。しかし、最近読んだ『小説海』第一巻第六号(1915.6.1発行)中に、『老残遊記』の作者を劉鉄雲とし、その経歴を紹介した文章を見つけた。錢玄同より一年九カ月、胡適より七年八カ月も早いことになる。その文章は、『榛梗雜話』(餘生 樂水著)中の「老残遊記」という。樽本氏によれば、おもしろいそうなので、原文の写真を掲げる。

著者の「餘生」「樂水」については不明である。

『老残遊記』を胡適と同様に『文明小史』、『官場現形記』と並べて評価し、劉鉄雲が自らを「老残」に託し、事実に基づいて著したと考えている。

劉鉄雲を「皖人」とするのは、良友圖書印刷公司発行『老残遊記二集』(1935.3.1)に付された劉鉄孫の跋と同じ誤りであろう。

「與比人鞦韆。譴戍新疆。」は、ベルギー人とトラブルを起こし、新疆に流されたと読めるが、当時の噂であろうか、詳細は不明である。



更に、小説の登場人物のモデルを挙げている。剛弼を剛毅としたり、白子壽を黃子壽(黃彭年)とする所は、後の胡適によるモデル探索(「老残遊記序」(亜東圖書館発行『老残遊記』1925.12))よりも進んでいるのではないかとさえ思わせる。(もちろん、胡適が知りながらこの説を採らなかったとも考えられる)

難。或即書中召村等之所由來。包村領袖包立生。其爲戰嚴勒部伍。力保行列。而設青紅皂白黃五色旂幟。錯綜變化。以衝敵軍。敵爲所迷眩。不戰自亂。雲天彪旗分五色。取材蓋由是耳。

老殘遊記

老殘遊記。爲近時小説中佳本。描摹社會。得其真相。可與文明小史。官場現形記等相頡頏。文筆雅潔。靈動。而北拳南革之預言。尤見奇中。按是書著者爲皖人劉鐵雲。其行事略如書中老殘之自況。後以辦理福公司交涉。與比人膠贖。譴戍新疆。旋竟卒於其地。書中所述。皆本於事實。其人物亦班班可考。若玉賢之爲毓賢。剛弼之爲剛毅。其行事已昭昭在人耳目。莊勤果公即張曜。撫魯時頗事虛聲。好延攬賓客。一時撫署附近。旅棧寓客。充塞至不能容。張公均予接納。時致餽遺。豐厚有加。而諮詢之事。則月不得一。顧一時已嘖嘖人口矣。白子壽太守。即黃子壽。黃名彭年。黔人。少時曾文正家書中。曾稱其英器非凡。後爲能吏。嘗任秦藩。又主講關中蓮池二書院。崇士右文。頗邀時譽。尤以決獄才見稱。書中

榛 梗 雜 話

二十五

榛 梗 雜 話

記其明察平反。蓋著實也。

二十六

『小説海』第一卷第六号1915.6.1

この文章は、短いながら、胡適や魯迅に評価される前の民国初期に『老殘遊記』がどのように見られていたかを示す珍しい資料と言えるだろう。

四

(DU Bi'en)